

「報恩講に想う」

今年も報恩講のお勤めが、お寺やご門徒の家々で行われる季節となりました。諸先輩方より「報恩講は親鸞聖人を迎えて、ご恩を謝し如来のおたすけに与ったことを喜ぶ勤めである」と教えられておりますが、改めて、この一年といわず、これまでの日々を振り返ってみると、『聖人その人にどれだけ出遇えていたのか、その御心に少しは耳を傾けてきたのであろうか』と思わずにはおれません。

親鸞聖人の名を口にしながら、その教えの言葉を語りながら、その実は『自分の思いをより確かなものと思いつめるためであったり、自分の考えを他人に納得させるための補強』であったりしました。

しかし、聖人の御一生は、御消息と呼ばれるお手紙などをいただくに、かつてその元に身を寄せ教えを受けた、師法然上人の御こころというものを、眼前の一人に対して、繰り返し繰り返し、丁寧に丁寧に、その人に伝わるように心を尽くしていかれた御姿といただけます。晩年になって、多くの執筆をなされたのも、ご自身が師法然上人から受けた恩に報いる道として、その頂かれた御こころの全てを、法然上人に出遇えなかった人々に残されたのではないのでしょうか。

ひとたびの出遇いが、その後の人生を貫いていく。その出遇いとは、法然上人の教えによって知らされた、疑いようの無い、顕かな、聖人御自身との出遇いでこそあったのでしょうか。

自分自身の身が定まるからこそ、人生が定まっていくということなのでしょう。

未だ親鸞聖人の後姿、いえ、その足跡さえ見つけられない私は、気づかぬままに、自身の人生にも深く迷っているのでしょうか。

また、一年を、ただ忙しく過ごし、報恩講をあわただしく終え、そして、やれやれと一息つく中でこそ、親鸞聖人のことを想うのです。